

広島大学文学部  
国語学研究室蔵

医心方卷第七影印並に釈文

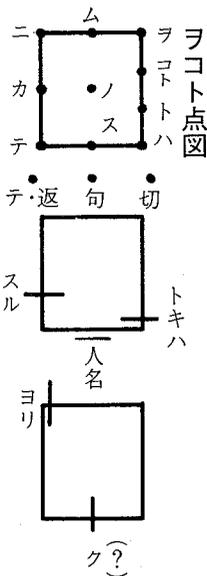
松  
本  
光  
隆

広島大学文学部国語学研究室に、江戸時代に模写されたと思われる朱墨の訓点を有する医心方巻第七（以下広大本と略称する）一巻がある。縦二七・二種の楮紙を二十四紙縫いだ卷子本で、外題は「陰瘡并殺道部」とあり、内題・尾題は「医心方巻第七」とある。近年修理され、本紙の裏打がなされ、原表紙に新表紙が継がれ、軸も新たに変わったものである。

広大本には奥書・識語がないが、宮内庁書陵部蔵医心方巻第七・安政版医心方巻第七（以下各書陵部本・安政版と略称する）と比較すると、形態的に（本文の字配り、虫損跡の模写、傍訓等）非常によく一致するので、書陵部本・安政版と同系統の模写本であると考えられる。書陵部本や安政版の成立事情や底本の素姓は、安政版の序、書陵部本・安政版の巻第八付載の奥書に詳しい。これに従えば、広大本は、江戸時代には和氣氏の末流半井家の所蔵であった藤原行盛と丹波重基との二系統の訓点を有する天養二年の移点本をもととした模写本であると考えられる。書陵部本には、巻末に「裔孫元堅謹命弟子館林杉本則行影摹」『久志本常貫謹校』との模写校合の識語があるが、広大本には、これに類するものもないので、模写の事情は明らかではないが、書陵部本と親子か兄弟関係にある模写本と考えられる。

広大本模写の背景には、江戸時代において医書の模写が盛んに行われたという事実があるものと思われる。例えば、医心方では右掲の諸書の他に、仁和寺医心方五帖が著名である。院政期の書写・加点と考えられるもので、奥書・識語がなく、その素姓は明らかではない。内閣文庫には、仁和寺蔵の医心方を模写したとする寛政三年の多紀元應の識語を有する、医心方十九卷十九冊と題末詳医書断簡一冊との計二十冊を一纏としたものが所蔵されている。現存の仁和寺蔵医心方五帖と内閣文庫所蔵本とを比較すると、内閣文庫所蔵本は、現存の仁和寺蔵医心方の模写本であることが判明する。又、大東急記念文庫には、内閣文庫所蔵の寛政三年の識語を有する模写本をさらに模写した文政三年の福山藩土伊沢信恬の識語を有する所蔵本がある。医心方の他、真本千金方に関しては、天保三年の跋を有する模刻本が存在する等の例を採っても、江戸時代に医書の模写・模刻が盛んに行われていたものと知ることができる。広大本の模写にもこうした背景があったものと考えられる。

広大本には、本文に、墨書の仮名・返点・声点・合符・音注・意義注・本文用字に対する書入と、朱書の仮名・ヲコト点・返点・声点・合符・庵点・意義注・本文用字に対する書入がある。ヲコト点は、明経点に一致する。これに加えて、黄筆の見消符と、一時書入れられて後に擦消された緑筆の音注・本文用字に対する書入がある。広大本の模写のもととなった天養二年の移点本の素姓は、書陵部本・安政版の巻第八の識語より明らかで、二系統の訓点が存在するが広大本におい



ても、右の朱墨の書き分けにより二系統の訓点を識別することができる。仁和寺蔵本には奥書・識語はなく、内閣文庫蔵の二十冊にも、寛政に先立つ識語がなく、その素姓は明らかではない。この点からも広大本の資料的価値は高い。又、安政版には、ヨコト点削除され、朱墨の書き分けもないから、広大本の資料的価値は、書陵部本と同等のものと考えられる。

## 釈文凡例

- 一、広島大学文学部国語学研究室蔵医心方巻第七の全文を、加えられた訓点に基づき訓読して釈文を作成した。釈文は、本来院政期に付されていたと考えられる訓点にのみ従い、後世の補筆と判断したものは採用しない。
- 一、釈文は、原本のヲコト点を平仮名で、仮名を片仮名で示し、私に補読したものは片仮名を（ ）に包んで示した。不読の漢字は（ ）に包んで示し、再読の二度目の読みも（ ）で包み右下に再読であることを注した。
- 一、原本のヲコト点・庵点を除いた朱書の仮名・符号は、\*印を付して示した。
- 一、原本の符号のうち庵点は全例朱書であるので、特に注記していない。声点については、当該字の下に（平）等と注記した。
- 一、原本の割注は、（ ）に包み一行流しとした。
- 一、句読点は、原本に従い右下の「・」を「。」で、中下の「・」を「、」で示し、原本に存在しないものは私に補わない。
- 一、漢字の字体は、通行の旧字体に従い、片仮名の字体は、現行の字体に改めるのを原則とした。
- 一、原本の本文に付された注記類のうちの頭注は、釈文末に注記した。
- 一、釈文の作成において、書陵部蔵医心方巻第七との異同が存在するものは、釈文末に注記した。

醫心方卷第七

從五位下行鍼博士兼丹波介丹波宿禰康賴撰

陰の瘡を治(スル)、方第一 陰の蝕<sup>シ</sup>瘡盡(キム)と欲<sup>ス</sup>るを治(スル)方第二 陰の癢<sup>カユル</sup>を治(スル)方第三「陰莖<sup>ハレ</sup>ノ腫<sup>イタキ</sup>痛<sup>キ</sup>」を治(スル)方第四 陰ノ囊<sup>フクリ</sup>陰囊<sup>フクリ</sup>ノ腫(レ)痛(キ)を治(スル)方第五 陰ノ

卵ノ腹に入(リ)て急<sup>キ</sup>痛(キ)を治(スル)方第六「陰ノ囊<sup>ハレ</sup>ノ腫<sup>イタキ</sup>痛<sup>キ</sup>」を治(スル)方第七 陰ノ

類<sup>ヒ</sup>陰ノ類<sup>ヒ</sup>を治(スル)方第八 脫<sup>ニリ</sup>肛<sup>イソノ</sup>を治(スル)方第九「殺道<sup>シクリノ</sup>癢<sup>カユル</sup>」を治(スル)方第十 殺<sup>シ</sup>

道ノ赤(ク)痛(キ)を治(スル)方第十一 殺<sup>シ</sup>道(ノ)「殺道<sup>シクリノ</sup>癢<sup>カユル</sup>」を治(スル)方第十二 殺<sup>シ</sup>

ヲ治(スル)方第十三 疔<sup>ヒ</sup>蠶<sup>マ</sup>を治(スル)方第十四 諸(ノ)痔を

治(スル)方第十五「九虫を治(スル)方第十六 三虫を治(スル)方第十七 寸白を治(スル)方第十八

八「蛔<sup>ヒ</sup>虫<sup>ムシ</sup>を治(スル)方第十九 繞<sup>ヒ</sup>虫<sup>ムシ</sup>を治(スル)方第二十

10 ●●陰(ノ)瘡を治(スル)、方第一

●病源論(ニ)云(ク)、腎<sup>腎</sup>は「於」陰に營<sup>營</sup>(ス)。腎ノ氣虛(シクシ)て津ノ液を制すること能(ハ)

不<sup>レ</sup>は、「不<sup>レ</sup>制すること能(ハ)不<sup>レ</sup>津ノ液ナレハ」「則」汗ノ濕(ス)。「虚(シク)は「則」風ノ邪(ノ)

爲(ニ)、乘(セ)所(ル)。邪、湊ノ理に容(リ)而正<sup>ス</sup>氣、「氣を正(ス)泄<sup>シ</sup>サ不<sup>レ</sup>は、邪ノ正、「相

干<sup>レ</sup>て皮ノ膚に在(リ)。故に癢<sup>ル</sup>、之を搔<sup>ケ</sup>ハ、「則」瘡を生(ス) ●葛氏(カ)方(ニ)、男子(ノ)

「陰ノ瘡癩<sup>タガ</sup>ル、を治(スル)方、黄蘗を削<sup>テ</sup>煮<sup>テ</sup>て「以」洗(ヘ)「之」。「洗(フ)之」と「之」日に十一過

●又方(ニ)狼<sup>ム</sup>「牙<sup>ツナ</sup>草<sup>ナキ</sup>」(ノ)「根を煮<sup>テ</sup>て「以」洗(ヒ)漬(セ)之」。「洗(ヒ)漬(ス)之」と「之」日

に五六過（今案（スルニ）様要方に狼牙ニ把水四升） ● 又方（ニ）黄<sup>（五種）</sup>一連、「黄<sup>（キハタ）</sup>藥、分一筭（シ）て搗（キ）て肥エタル猪（ノ）共ノ汁を以て之を煮て【煮<sup>（ヒ）</sup>ル】滓<sup>（カス）</sup>を去（テ）て【以<sup>（テ）</sup>】漬<sup>（ヒ）</sup>セ【之<sup>（ノ）</sup>】【漬<sup>（ヒ）</sup>ス【之<sup>（ノ）</sup>】】。復、  
 「此<sup>（ノ）</sup>ニ物を搗<sup>（ツ）</sup>イテ絹（モ）て【絹<sup>（ノ）</sup>】篋<sup>（カ）</sup>下<sup>（ノ）</sup>シて【以<sup>（テ）</sup>】瘡<sup>（カ）</sup>に粉<sup>（コ）</sup>ケヨ。日（ニ）五（タヒ）六（タヒ）。  
 又陰（ノ）蝕瘡を治（ス）。 又方（ニ）地榆<sup>（トヒスホ）</sup>「地<sup>（ノ）</sup>榆<sup>（ノ）</sup>」を「煮<sup>（ヒ）</sup>て【以<sup>（テ）</sup>】洗<sup>（ヒ）</sup>ヒ漬<sup>（ヒ）</sup>」【之<sup>（ノ）</sup>】【漬<sup>（ヒ）</sup>ス【之<sup>（ノ）</sup>】】。甘<sup>（ク）</sup>一  
 草を合（ス）、尤（モ）佳（シ） ● 范汪（カ）方（ニ）、人（ノ）陰（ノ）「頭斷（チ）て瘡を生（ス）を  
 治（スル）、方 蕪菁<sup>（アヲナ）</sup>一把を、切（リ）て水（モ）て煎<sup>（ヒ）</sup>（ラ）令（メ）て之を食（セヨ） 【様要方（ニ）、  
 陰（ノ）瘡を療する方 黄<sup>（五種）</sup>連三分 胡<sup>（コ）</sup>粉一分 葵<sup>（キ）</sup>黄<sup>（ハタ）</sup>「三分 散<sup>（ヒ）</sup>に【散<sup>（ヒ）</sup>】爲<sup>（ス）</sup>て瘡の上に傅<sup>（ツ）</sup>ケヨ【傅<sup>（ツ）</sup>ケ  
 ● 集驗方（ニ）、云（ク）陰ノ患一瘡の方 蜜を以て甘一草（ノ）末を「煎<sup>（ヒ）</sup>シて之を塗<sup>（ル）</sup>レ。【煎<sup>（ヒ）</sup>シて】甘一草  
 末（キ）て之を塗<sup>（ル）</sup>【良（シ）】 ● 又云（ク）陰（ノ）頭に、瘡を生（シ）て安一石一榴ノ「花<sup>（ノ）</sup>の如  
 く（シ）て大（キナル）者捲<sup>（ク）</sup>の如（ク）ナル方 虎ノ牙<sup>（キ）</sup>、犀ノ角<sup>（ツノ）</sup>、刀を（モ）て刮<sup>（ク）</sup>て末（キ）て猪ノ膏<sup>（ニ）</sup>  
 を以て煎（シ）て色を變<sup>（セ）</sup>令（メ）て滓<sup>（カス）</sup>を去（ケ）て日に三（タヒ）塗<sup>（ル）</sup> 【塗<sup>（ル）</sup>】 又方（ニ）烏賊魚<sup>（イカ）</sup>  
 骨<sup>（ツノ）</sup>を以て末（キ）て之を粉<sup>（コ）</sup> 【粉<sup>（コ）</sup>】。良（シ） 「又方（ニ）鱉<sup>（カハタ）</sup>ノ甲<sup>（カ）</sup>を、燒（キ）末（キ）て鶏一子<sup>（ニ）</sup>  
 白<sup>（ク）</sup>を以て和（テ）て之を傅<sup>（ツ）</sup>ケヨ 【傅<sup>（ツ）</sup>ケヨ】。良（シ） ● 隨時方（ニ）、陰の「患瘡を治（スル）方 薤<sup>（ニ）</sup>（ノ）白<sup>（ク）</sup>【薤<sup>（ニ）</sup>白<sup>（ク）</sup>】  
 を取（リ）て蘇<sup>（ク）</sup>に和（テ）て之を傅<sup>（ツ）</sup>ケヨ 【傅<sup>（ツ）</sup>ケヨ】。齒<sup>（ニ）</sup>日に、即（チ）差（ユ） ● 千金方（ニ）陰に瘡を生（ス）  
 を治（スル）方 地榆<sup>（トヒスホ）</sup>八兩 黄藥<sup>（ニ）</sup>八兩 二味、水「一斗五升を以て煮<sup>（ヒ）</sup>て六升を【六升<sup>（ノ）</sup>】取（リ）て滓<sup>（カス）</sup>を  
 冷一暖<sup>（ク）</sup>を適（ヘ）て用（申）て瘡<sup>（カ）</sup>を洗（ヘ）。日に再（ヒ） ● 又云（ク）「妬<sup>（ニ）</sup>一精<sup>（ノ）</sup>一瘡<sup>（ノ）</sup>は【者<sup>（ノ）</sup>】【者<sup>（ノ）</sup>】  
 男子は陰ノ頭<sup>（ノ）</sup>の節<sup>（ノ）</sup>ノ下に在（リ）、婦人は玉一門<sup>（ノ）</sup>の内に在（リ）。並<sup>（ニ）</sup>、「甘一瘡<sup>（ノ）</sup>に似<sup>（テ）</sup>て治<sup>（ス）</sup>大（イ）に、痛（キ）

骨<sup>（ツノ）</sup>を以て末（キ）て之を粉<sup>（コ）</sup> 【粉<sup>（コ）</sup>】。良（シ） 「又方（ニ）鱉<sup>（カハタ）</sup>ノ甲<sup>（カ）</sup>を、燒（キ）末（キ）て鶏一子<sup>（ニ）</sup>  
 白<sup>（ク）</sup>を以て和（テ）て之を傅<sup>（ツ）</sup>ケヨ 【傅<sup>（ツ）</sup>ケヨ】。齒<sup>（ニ）</sup>日に、即（チ）差（ユ） ● 千金方（ニ）陰に瘡を生（ス）  
 を取（リ）て蘇<sup>（ク）</sup>に和（テ）て之を傅<sup>（ツ）</sup>ケヨ 【傅<sup>（ツ）</sup>ケヨ】。齒<sup>（ニ）</sup>日に、即（チ）差（ユ） ● 千金方（ニ）陰に瘡を生（ス）  
 を治（スル）方 地榆<sup>（トヒスホ）</sup>八兩 黄藥<sup>（ニ）</sup>八兩 二味、水「一斗五升を以て煮<sup>（ヒ）</sup>て六升を【六升<sup>（ノ）</sup>】取（リ）て滓<sup>（カス）</sup>を  
 冷一暖<sup>（ク）</sup>を適（ヘ）て用（申）て瘡<sup>（カ）</sup>を洗（ヘ）。日に再（ヒ） ● 又云（ク）「妬<sup>（ニ）</sup>一精<sup>（ノ）</sup>一瘡<sup>（ノ）</sup>は【者<sup>（ノ）</sup>】【者<sup>（ノ）</sup>】  
 男子は陰ノ頭<sup>（ノ）</sup>の節<sup>（ノ）</sup>ノ下に在（リ）、婦人は玉一門<sup>（ノ）</sup>の内に在（リ）。並<sup>（ニ）</sup>、「甘一瘡<sup>（ノ）</sup>に似<sup>（テ）</sup>て治<sup>（ス）</sup>大（イ）に、痛（キ）



灰に作(シ)て傳(ケヨ)【之】

●又云(ク)男子の陰の頭に、「瘡を生(シ)て精ネに【精ノ】食(ヒ)

鬻(ヒ)て盡(キム)と欲(ス)る方 當歸カマギ、夕藥トスヤク、黃芩ワウキン、朮射香ジュセウカウ「白粉ハクフ、湯ツクに爲(テ)一(タヒ)、之を洗(ハ)【洗之】

●令(カ)方(ニ)、陰(ノ)蝕(シ)治(スル)、蒲黃散(ノ)方「蒲黃ホウワウ二兩、桐ノ皮キ二兩、甘草二兩、凡

(ソ)三物、搗(キ)篩(ヒ)て創の「上に粉(ケヨ)。三(タヒ)に過(キ)不(シ)て愈(ユ) ●十

金方(ニ)、陰(ノ)蝕瘡を治(スル)方 肥(エタル)猪ノ肉を水「三升を以て肉を煮て極(メテ)爛(サ

令(メ)て肉を去(ケ)て極(メ)物熱(カラ)令(メ)て使(チ)、以(モ)て瘡(ノ)中(ニ)灌(イ)【灌ル】。『即

(チ)愈(ユ) 又方(ニ)雄黃二分、硃石二分(燒(ケ)) 麝香半分、三味篩(ヒ)て「以(チ)瘡(ノ)

上に粉(ケヨ) ●虫人ノ陰(ノ)莖、并(セ)て囊(シ)食(ヒ)て盡(キム)と欲(ス)るを治(スル)方 鯉ノ骨

を燒(キ)て灰に【灰(シ)】爲(シ)て黃(ノ)葉の汁に和(テ)て塗(レ)【之】 又方(ニ)鮡魚を燒(キ)

て醬(シ)汁シユに和(テ)て塗(レ)【之】

●陰の瘻(カ)を治(スル)方第三

●病源論(ニ)云(ク)、夫(レ)、虚(ノ)勞(スル)ときは【虚(ノ)勞(シ)て】腎の氣を損(ヒ)て足(ヲ)不(ス)。

故に陰、冷(エ)て汗(ハ)液自(ラ)泄(ル)。風(ノ)邪、乘(ル)ときは【之】、【乘(リ)之】、【則】、【極(キ)。

瘻(ル)】 ●錄驗方(ニ)陰の瘻(リ)て瘡多(クシ)て少(シ)汁有(ル)【者を治(スル)、汁有(ル)。

を治(スル)【者】方 黃蘗を煮(タル)、汁を、【黃蘗(ノ)汁を煮(テ)】冷(シ)て洗(ヒ)漬(シ)て

蛇床子ヒルムシロ、黃(ノ)連(ノ)末を俾(ツ)【俾(ク)】 ●新錄要方(ニ)、陰瘻【瘻(リ)】て水出(テ)て差(ユル)。

こと能(ハ)不(ル)、者を治(スル)方、干薑カンキヤウ末(キ)【干薑末(キ)】之を粉(ケ)【ヨ】粉(ク)】

60

「又方(ニ)水を(モ)て煎菁(ノ)子を煮て洗(ヒ)、并(セ)て末(キ)て上に粉(ケ)ヨ<sup>イ</sup>粉ク」  
 又方(ニ)杏<sup>カモ</sup>ノ人を、焼(キ)て油を取(リ)て之を塗(レ) 又方(ニ)水(ヲ)モテ<sup>ナク</sup>棘ノ針を煮て  
 洗(ヘ)之<sup>イ</sup> 又方(ニ)水(ヲ)モテ<sup>イ</sup>桃ノ皮葉を煮て洗(ヘ)之<sup>イ</sup> 又方(ニ)薤<sup>ニ</sup>ノ白<sup>ニ</sup>薤<sup>ニ</sup>白<sup>ニ</sup>  
 を取(リ)て搗(キ)て汁(モ)て汁<sup>イ</sup>塗(レ)之<sup>イ</sup> 又方(ニ)脊<sup>イ</sup>ノ窮骨<sup>イ</sup>窮骨<sup>イ</sup>を灸(セヨ)。  
 龜一尾と名(ツク)。「年に依(リ)て壯(セヨ)七壯。又足の大指の叢毛の中を灸(セヨ)多サ、七壯(三  
 至(レ)並(ニ)良(シ) 」「様要方(ニ)、陰(ノ)痒<sup>イ</sup>痒<sup>イ</sup>濕(ヒ)て瘡を生(シ)て年(ヲ)歴  
 (ル)トモ、差(エ)不(ル)を治(スル)方 桃<sup>イ</sup>ノ核<sup>イ</sup>ノ中人を、焼(キ)て末(キ)て七枚を服(セ  
 ヨ)。「服(スル)シ」と日(ニ)三(タヒ)廿<sup>イ</sup>枚を服(シ)て三日に愈(ユ) 又方(ニ)胡麻を嚼<sup>イ</sup>ムて  
 瘡<sup>イ</sup>に傳(ケ)ヨ<sup>イ</sup>傳<sup>イ</sup>ク。四五度<sup>イ</sup>に「過(キ)不(シ)て愈(ユ) 」「龍華方(ニ)、男子の陰の下(ノ)創  
 の瘡(リ)濕(フ)を治(スル)方「白<sup>イ</sup>粉一分 干<sup>イ</sup>薑三分 牡<sup>イ</sup>蠣三分、三物下(シ)篩(ヒ)て卧<sup>イ</sup>サ  
 ムト欲<sup>イ</sup>ル、時に粉(ケ)ヨ<sup>イ</sup>粉<sup>イ</sup>ク。 夜に三四(タヒ)、之を粉(ケ)ヨ 」「効驗方(ニ)、牡<sup>イ</sup>蠣一散ノ男  
 子の陰の下、痒<sup>イ</sup>濕<sup>イ</sup>フを治(スル)方「牡<sup>イ</sup>蠣三分 干<sup>イ</sup>薑三分 凡(ソ)ニ物、下(シ)篩(ヒ)以<sup>イ</sup>粉  
 (ケ)ヨ。日にニ(タヒ) 」「僧深方(ニ)、陰(ノ)下濕(ヒ)痒(リ)て瘡を生(ス)を「治(スル)  
 方 吳<sup>イ</sup>茱萸一升、凡(ソ)一物、水三升を以て三沸を「煮て「煮て三沸(シ)て「以<sup>イ</sup>滓<sup>イ</sup>を去(ケ)て瘡  
 を洗(ヘ)之<sup>イ</sup>。瘡を洗(ハ)ば愈(ユ) 又方(ニ)溝<sup>イ</sup>黃瘡ノ上に粉(ケ)ヨ<sup>イ</sup>粉<sup>イ</sup>ク。日に三過。即(チ)愈(ユ)。  
 又方(ニ)甘<sup>イ</sup>草一尺、凡(ソ)一物<sup>イ</sup>一物を、水五升を(モ)て煮て三升を「三升に」取(リ)て  
 洗<sup>イ</sup>一漬(セ)之<sup>イ</sup>。「洗<sup>イ</sup>一漬(ス)三(タヒ)日(ニ)三(タヒ)。「三(タヒ)「便(チ)愈(ユ)神(タ)

65

70

良(シ) ●耆婆(カ)方(ニ)、人の陰の下痒(フ)を治(スル)方 蛇床子(ヒルムシロ)、蛇(ネ)、床子(ネ)を、末に作(シ)て「米ノ分粉(ハ)に和(テ)て之少々、之を粉(ケ)ヨ」粉(ツ) ●刪繁論(ニ)、陰に濕(瘡を生(ス))を治するに、包(用(ル)) 石流黄(ウヅク)、末(キ)て之を「傅(ケヨ) ●集驗方(ニ)大人、小兒の【小兒(ウ)】陰莖の痒(ユ)りて汁出(ツル)を治(スル)方、生(シ)キ大(豆)を取(ハリ)て皮を「刮(ク)去(ケ)て煎(ク)嚼(ガ)ムて之を塗(レ) ●本草拾遺(ニ)云(ク)、牡蠣ノ殻、麻黄ノ「根、蛇床子、干薑に和(テ)て粉に爲(ル)は陰(ノ)汗を去(ク)」

●陰莖(ノ)腫(レ)痛(キ)を治(スル)、方第四

●病源論(ニ)云(ク)、陰腫(陰腫(ノ))候は此(レ)、風(熱)、於(腎ノ經に容(リ))、於(陰(器)陰(器))に流(ル)に由(リ)て「腎虚(シクシ)て宣(散)すること能(ハ)不(ル)故に腫(ヲ)致(ス) ●范汪(カ)方(ニ)、卒に陰の腫(レ)て死(ナム)と欲(す)るを治(スル)方「急(カ)に下(藥)を服(シ)て大(イニ)下(サ)使(ム)レハ、即(チ)佳(シ) 又方(ニ)烏賊(魚)骨(末(キ)て粉(ツ) 又方(ニ)蛇(床)子(腫(レ)て「瘡を生(シ)て汁(出(ツル))を治(スル)方 濃(ク)、黄蘗(を)煮(て)汁(を)管(ノ)中(に)シ)て漬(漬(ス))之(」 又方(ニ)濃(ク)、水(楊(ノ)葉(を)煮(て)管(ノ)中(に)シ)て温(カ)シて漬(漬(ス))之(」 ●又方(ニ)當歸(三分)、黄連(三分)、小豆(一分)、凡(ソ)三物、搗(キ)篩(ヒ)て「以(上)に粉(ケ)ヨ」 ●又方(ニ)杏(ノ)人(を)、鷄(子)白(に)和(テ)て塗(レ)之(」 ●又方(ニ)跋(三)粒(を)「燒(キ)て末(キ)て之(を)傅(ケヨ) ●又方(ニ)白(蜜)を以(て)塗(レ)之(」 ●又方(ニ)牛(矢)を燒

(キ)て「末(キ)て苦一酒ヲ苦酒ニに和(テ)て塗(レ)之」 ●又云(ク)陰莖ノ怒(キ)に腫(レ)

痛(クシ)て忍(フ)可(カラ)不(ル)方 雄黃「燧石、各二兩甘草三尺。水ニ斗を(モ)て煮て二升

を取(リ)て「以」之を潰(セ) ●又云(ク)卒に「陰痛(クシ)て列サス如(クシ)て汁出(ツル)

こゝ雨の如(キ)を治(スル)方 小蒜一升、韭(ノ)根一斤、楊柳ノ根「一斤、右三物合一燒(キ)て

酒を以て灌(キ)之」て熱ヲ及ヲ「及」熱ウシテケ氣を以て陰を蒸セテ蒸スル (千金方同(シ)之)」

●千金「方(ニ)陰ノ腫(レ)痛(キ)を治(スル)方 萹菜(ノ)根を搗(キ)て付(ケヨ)之」 又

方(ニ)酒(モ)て桃一人の「末(キ)タルを服(セヨ)彈丸を末ノ彈丸を服(セヨ)大(クシ)て

三(タヒ)服(セヨ) ●又云(ク)玉一莖(ノ)痛(キ)方、甘草、石一蜜一末(モ)て乳に和(テ)

て洗ヘ洗フ之」 ●龍華方(ニ)陰(ノ)頭腫(レ)て潰ユ敗(レ)壞ル、を治(スル)方 甘一

草一分、「烏頭ト頭ト一分、夕藥一分、敗ト醬ト二分、四物、切(リ)て水四升を以て煮て三升を「三升に」取

(リ)て洗(ヘ)之」日(ニ)三(タヒ) ●陰莖(ノ)頭ノ腫(レ)て創を生(シ)て黃(ナル)汁出

(ツル)を治(スル)方「干薑を末ト搗(キ)て上に傅(ケ)ヨト傅ク再(ヒ)三(タヒ)に過(キ)

不(シ)て即(キ)愈(ユ) ●新録單方(ニ)「陰(ノ)腫(レ)瘡(キ)を」方 桃一人を搗イて泥ニ

爲(シ)て水若ク酒ニ和(テ)て塗(レ)之」數易フ。差(エハ)止(メヨ) ●又方(ニ)蔓ヲ善ト(ノ)

子、并(セ)て根を末(キ)こノ之を對ス對ス ●枕中方(ニ)男子の陰(ノ)腫(ルル)を治(スル)

方、竈ノ中(ノ)黃ナル土を「以て酒を以て和(テ)之」て其(ノ)上に塗(レ)立チトコロニ愈(ユ)。

驗有(リ)

●陰囊ノ腫(レ)痛(キ)を治(スル)方第五

●千金方(二)、陰囊(ノ)腫(レ)痛(キ)を治(スル)方 酢に麵を和(テ)て塗(レ)之」 ●又方(三) 酢に、熱(フツ)灰を和(テ)て熨(セ)之」 ●又方(三) 釜月下土(ノ)釜月下土(ノ)を、鶏(子)子(子)白に和(テ)て付(ケ)之」 ●葛氏(カ)方(三) 男(子)子(子)陰卵(ノ)卒(ニ)腫(レ)痛(キ)を治(スル)方 牛ノ矢を焼(キ)末(キ)て苦酒を以て和(テ)て傅(ケ)之」 ●又方(二) 蛇(一)末(子)末(キ)て鶏(子)子(子)黄に和(テ)て傅(ケ)之」 ●又方(三) 蕪(一)青を搗(キ)て塗(レ)之」 ●又方(三) 足ノ大指(ノ)第二節(ノ)横(ナル)文理(ノ)正(二)中央(一)を「灸(セヨ)」。五壯。佳(シ) ●醫門方(二)、

陰卵(ノ)腫(ルル)を治(スル)方、桂心(ノ)末を以て「以(レ)桂心(末)末(キ)て之を塗(レ)」。佳(シ) ●又方(二) 大黃を末(キ)て酢に和(テ)て塗(レ)之」。並(ニ)佳(シ) ●又方(二) 巨(カ)莢を取(リ)て炙(テ)皮を去(ケ)て子(末)末(キ)て水に和(テ)て塗(レ)之」。立(チ)トコロ(ニ)消(ユ) ●又云(ク) 卒に陰(卵)腫(レ)て疼(キ)痛(ク)シて忍(フ)可(カラ)不(ル)を「療(スル)方(ノ)大指(指)ノ頭(ニ)灸(セヨ)」。瓜(ノ)甲(ヲ)去(ル)こと、韭(ノ)葉(ノ)如(シ)。年(ニ)隨(ヒ)て壯(セヨ)。

右(ノ)核腫(レ)は右(ヲ)灸(セヨ)。左腫(レ)は左(ヲ)灸(シ) 兩(ノ)核(ノ)俱(ニ)腫(レ)は俱(ニ)之(ヲ)灸(セヨ)。一宿(ニ)愈(ユ) ●又方(二) 玉莖(ノ)頭(ノ)頭(ノ)を以て下(ニ)向(ケ)て囊(ノ)縫(ヲ)正(シ)て莖(ノ)頭(ニ)點(シ)て縫(ノ)上(ニ)當(テ)て三壯(灸)セヨ。(或(ハ)七壯)即(チ)消(ユ) ●博洛安衆方(三)、

久(シク)、卑濕(冷)處(ニ)坐(立)スル(ト)きは忽(チ)に陰囊(虚)シク腫(レ)て氣(上)リて人(ヲ)築(ク)を「治(スル)方」 右(米)米(ノ)酢(ヲ)以て黑豆(ヲ)炒(テ)青(キ)布(ニ)裏(ミ)て心腹(ヲ)熨(セ) ●集

駿方(ニ)、卒(ニ)卵(ノ)腫(ルル)を治(スル)方 菘（豆）に、桃(ノ)人を搗(キ)て付(ケヨ)「之」。  
 煇（ハカハカ）は煇ケハ「則」易(ヘヨ)。「易(ヘ)」亦、婦人(ノ)陰ノ腫(ルル)を治(ス)。「玄女經(二)云(ク)、男子(ノ)陰一卵(ノ)腫(ルル)を療(スル)方 桃(ノ)人を取り搗(ク)に、皮、尖（トウ）を去(ケ)、皮（ヲ）を去(ケ)尖、并(セ)て雙（トウ）人アルを筒（トウ）「除（ス）テ（テ）熬（リ）りて色を變(セ)令(メ)て末（ヲ）に作（シ）て丸(カシ)て彈（ム）丸の如(クシ)て酒(モ)て服(セヨ)「之」

●●陰卵（イ）ノ、腹に入(リ)て急(カニ)痛(キ)を治(スル)、方第六

●葛氏(カ)方(ニ)、陰一丸ノ卒に縮（ツ）マ(リ)て腹に入(リ)て急一痛(シ)て死(ナム)と欲(ス)るを、名(ツケ)て陰一疝（イ）と曰(フ)を治(スル)、方「死(ナム)と欲(ス)るを治(スル)、名(ツケ)て陰一疝(ノ)方」と曰(フ)「狼毒（ヤマトク）四兩、防葵（ヤマイ）一兩、附子（ツブシ）二兩、右三物、蜜(ニ)丸(カシ)て服(セヨ)。「服(スル)」と梧桐（コウキョウ）ノ子（シ）如(シ)て「三丸。」「三丸」日夜(ニ)三過 ●玄女經(ニ)、房勞シ、卵腫（イ）レ、或は縮（ツ）マ(リ)て腹に入(リ)て「(腹)中絞(ル)ゴトクに痛(クシ)て絞一痛(クシ)て」或(ハ)便(チ)、氣絶(エ)て「便(チ)氣絶(エ)て」死(ナム)とするを療(スル)方 婦人(ノ)經月ノ布、衣ノ血「有(ル)、者を取(リ)て湯(モ)て「湯」洗（ワ）フて汁を取(リ)て服(セヨ)「之」(今案(スルニ)醫門方(ニ)灰（ハイ）に爲(シ)て酒(モテ)服(セヨ)。方寸(ノ)匕) ●又方(ニ)婦人の「陰の上(ノ)毛ニ七莖（シ）を取(リ)て灰（ハイ）に作(シ)て井一華（ケ）一水（スイ）を以て服(セヨ)「之」

●●陰囊（イ）の濕（シ）リ痒（カ）ルを治(スル)、方第七

●葛氏(カ)方(ニ)、陰囊ノ下の濕(リ)痒(リ)て「痒(リ)」「皮ノ剝（ハ）クルを治(スル)方 酸漿（ハ）、地榆（ハ）

(ノ)根、「及(ヒ)黄蘗を煮タル、汁をモテ『酸漿煮』地榆(ノ)根、及(ヒ)黄蘗(ノ)汁を(モ)て洗(ハ)」。皆良(シ)。  
 ●又方(ニ)栝ノ葉、塩各一升合煎(シ)て合(セ)て煎(シ)て以(テ)之を洗(ハ)畢(リ)て蒲黄を取(リ)て傅ク之。  
 ●又方(ニ)槐(ノ)枝を煮て以(テ)洗(ハ)之。  
 又方(ニ)「大麻(ノ)子を嚼(ミ)て傅(ケヨ)之」  
 又方(ニ)濃ク、杏葉を煮て洗(ハ)之。  
 ●醫門方(ニ)陰囊ノ下(ノ)濕(リ)痒(リ)て搔(キ)破(ラ)は極(カ)ケハ破(レ)レ水出(テ)乾(ケ)は即(チ)皮ノ剝(ハ)ケ起(ル)を「療(スル)方」  
 地榆、黄蘗、蛇床子、(各二兩)槐ノ白皮切(リ)て一升。水七升を(モ)て三升を取(リ)て「暖(カ)に(シ)て以(テ)瘡を洗(ハ)」。日に三四度。魚鮓を食(スル)コト勿(レ)。  
 ●玉房秘決(ニ)云(ク)、「陰囊(ノ)下(ノ)濕(ル)を治(スル)散方」  
 麻黄三兩、蛇床子二兩、夕藥、ター藥三兩、黄連三兩、棗米一升、橋(キ)末(キ)て粉(ケヨ)之。  
 ●又方(ニ)干薑、黄連、牡蠣、(各五分)棗米八分、橋(キ)篩(ヒ)て以(テ)之を粉(ケヨ)粉(ケ)。  
 又方(ニ)葱、藺(ノ)子(キ)て傅(ケヨ)之。

●陰(ノ)類  
 陰ノ類を治(スル)方第八

●病源論(ニ)云(ク)、「頰病(ノ)之」  
 状は「陰核」  
 陰核腫(レ)大(キクシ)て時(ト)小(シ)歇ムコト有(リ)。  
 ●歇(ム)時(ト)終(ニ)常(於)大(キ)ナリ。  
 勞(ト)冷(スレ)は「勞(ト)冷(シ)て陰(ノ)兩便(チ)發(ス)」。  
 ●發(セ)は「則(チ)脹(ル)大(ナリ)」。人(ノ)腰(ヲ)脊(ヲ)使(テ)攀(ル)急(シ)「身體(ニ)惡寒(シ)」。骨節(ニ)沉(ル)重(ナラ)使(テ)使(ス)む。  
 ●使(メ)此(ノ)病(ニ)於(テ)腎(ヲ)損(セル)ニ由(ル)也」  
 也。足(ノ)少(シ)陰(ノ)經(ハ)腎(ノ)之(ニ)脉(ナリ)也」  
 其(ノ)氣(下(リ)て於(テ)陰(ニ)通(ル)陰(ハ)宗(ノ)脉(ノ)之(ニ)聚(ル)所(ト)積(陰(ノ)之(ニ)

140 氣(ナリ)「也」。勞傷舉重(シ)、「於」少陰(ノ)「之」經を傷(フ)。其(ノ)氣「下(リ)て」「於」陰に衝

(リ)て氣脹(レ)て通(ハ)不。故に頰を成(ス)「也」 ●小品方(三)壯一丹一五「痔散は頰一疝(シ)。

陰一卵、偏(ニ)大(キ)に(シ)て氣有(リ)て上(リ)下(リ)て脹(レ)大(キクシ)て行(キ)

走(ラ)は腫(レ)大(キクシ)て妨を「爲(スヲ)治(ス)此(ノ)方を脹(セヨ)」「服(セ)」「長

(タ)驗(アリ) 壯一丹(心去(ケヨ)防風、桂心、豉ノ熬レル、黄「蘗 各一分、凡(ソ)五物

治(キ)下(シ)筋(ヒ)て酒(モ)て服(セヨ)一「刀圭上」廿日(ニ)愈(ユ)。

少小(ノ)頰一疝(ヲ)「治(スルニ)最(モ)良(シ)」。嬰兒は乳の汁を以て和(テ)て大豆の如(クシ)

て與(ヘヨ)「之」。「長一宿の人は服(セヨ)方寸(ノ)匕 ●又云(ク)男ノ頰、「頰(ハ)腸頰、卵脹有

(リ)」。有(リ)「水」頰氣頰四種有(リ)。腸頰、卵脹は差(エ)難(シ)。「難(ク)」「氣頰、水頰は針

灸スレは「則」差(エ)「易(シ)「也」 ●又云(ク)男(ノ)陰卵の偏(ニ)大(キナル)頰(ノ)方

有(リ)并(ミ)を灸シ、并(セ)て關一「元を灸(セヨ)百壯 ●又方(ニ)五一泉を灸(セヨ)百壯。關一「元

の下一寸に在(リ)。又方(ニ)足の「大陽を灸(セヨ)五十壯」「五十壯」并(セ)て足(ノ)大陰(ヲ)

灸(セヨ)五十壯。驗有(リ) ●又云(ク)頰病(ム)に、「病(ミ)」「陰卒に腫(ルル)者の方

足を合(レ)並(ヘ)て兩(ノ)大指を縛(フ)て爪を令(ヒ)並(ヘ)令(メ)て艾丸を以て「兩(ノ)爪

(ノ)端の方一「角ノ處を灸(セヨ)一丸。頃(チ)に、兩(ノ)爪(ノ)角(ノ)上に在(ラ)令(メヨ)

「也」。丸ノ半を令(一)「爪(ノ)上に上(セ)令(メヨ)佳(シ)七壯灸(セヨ)愈(ユ)」。已上千金方同

(シ)「之」(シ) ●千金方(二)云(ク)卵偏一「大に(シ)て上(リ)て腸に入(ル)方 三、陰一交を灸

(セヨ)。内ノ蹠(ノ)上ハ寸に在(リ)。年に隨(ヒ)て壯(セヨ)。「又云(ク)頰を治(スル)方 楊柳(ノ)枝を取(リ)て脚ノ大(キサ)の如(ク)シ」て指ノ大(キサ)長(サ)三尺ナル<sup>\*</sup>廿枚。水(ヨモテ)「煮て熱(カラ)令(メ)て故キ布<sup>ヲ</sup>及(ヒ)氈<sup>ヲ</sup>を以て腫<sup>レ</sup>タル處に掩(ヒ)て熱(キ)枝を取(リ)て更<sup>ニ</sup>牙(シ)柱<sup>ヲ</sup>「柱フ」之<sup>ヲ</sup>。此(ク)ノ」如(ク)シ」て「如(ク)ハ」差(ユル)を取(レ)」。 ●又云(ク)頰一疔(シ)、卵偏(ニ)大(キク)シ」て氣上(リ)下(リ)て脹<sup>ル</sup>、方。牡丹一分、「防風一分 二味酒(モ)て服(セヨ)。方オ(ノ)ヒ。日にニ(タヒ)」。 ●葛氏(カ)方(ニ)入超一躍(シ)、「攀一重(シ)て卒に陰一頰を得(ル)を治(スル)方 兩(ノ)足ノ大指ノ外ノ白一突ノ際<sup>ニ</sup>陷<sup>ル</sup>ナル」中を灸(セヨ)。艾一丸を令て半は爪(ノ)上に在(リ)、半は突(ノ)上に在(リ)令<sup>レ</sup>「令<sup>レ</sup>」。 ●七壯(范注(カ)方同(シ)「之」)

●又方(ニ)藉を以て口ノ廣(サヲ)度<sup>リ</sup>度<sup>リ</sup>倍(キ)「之」て度を申(ネ)て「以」小腹を約<sup>メ</sup>て大(キナル)横理<sup>ニ</sup>中<sup>テ</sup>「小腹(ノ)中ノ大(キナル)横理<sup>ヲ</sup>を約<sup>メ</sup>て」中央を令て正(ニ)齊<sup>ニ</sup>對(ハ)令<sup>レ</sup>「(メ)て乃(チ)兩(ノ)頭及(ヒ)中央三處を灸(セヨ)。年に隨(ヒ)て壯(セヨ)。善(ミテ)自(ラ)養(ヒ)て言<sup>ハ</sup>咲(シ)、「勞動(スル)こと勿(レ)」。 ●千金方同(シ)「之」」。 ●又方(ニ)白朮五分 地膚(ノ)子十分 桂心三分「右三物搗(キ)末(キ)て服(セヨ)」。『服(スル)』と「刀圭」。日(ニ)三(タヒ)

●脱肛<sup>ヲ</sup>を治(スル)、方第九

●病源論(ニ)云(ク)脱肛(トイフ)は「者<sup>ノ</sup>肛<sup>ノ</sup>門<sup>ノ</sup>の脱(ケ)出(ツルナリ)也」。多(ク)、久(ク)利<sup>ニ</sup>由(リ)て大(腸)虚(シ)ク冷(エ)て「爲<sup>ル</sup>」所<sup>ナリ</sup>。大腸虚(シク)シ而「於」寒利<sup>ニ</sup>に傷(ヒ)而「傷(ヒ)」而「氣唾<sup>ヲ</sup>を用(ヅル)ときは、其(ノ)氣下(リ)衝(キ)て「則」、「肛、脱一

出(ス)。因て脱肛と謂(フ)「也」。

- 千金方(ニ)云(ク)、脱肛には重(キ)を擧(ケ)、帶を急すること
- を禁(セヨ)。房室を「斷(チ)て周一年ナレは乃(チ)佳(シ)」
- 梅略方(ニ)、脱肛には重(キ)を擧
- (ケ)、滑ナル物を食(シ)衣帶(ヲ)急することを慎(ム)慎(ム)
- 小品方(ニ)、脱肛を治(スル)、驗(ア
- ル)方 精黃二兩「猪ノ膏三合 凡(ソ)二物、搗(キ)合(セ)て和(シ)て「以」肛の上に傳(テ)傳
- ク」蜜(ニ)迫メ内ル「蜜」(シ)「之」。「再(ヒ)三(タヒ)に過(キ)不(シ)て使(チ)愈(ユ)
- 又方(ニ)女萎一升を取(リ)て火に焼(キ)て烟を以て肛を勳(フ)勳(フ)即(チ)愈(ユ)「葛氏(カ)
- 方(ニ)、卒に大(一)便するに脱肛(ツル)を治(スル)方 頂上の廻髪の中を灸(セヨ)。百壯。「●又方(ニ)
- 猪(ノ)膏に、精黃を和(テ)て抑(内)内(空)抑(シ)以(モ)て之に「之を」粉ク、亦佳(シ)
- 又方(ニ)「石灰を熬(リ)て熱(カラ)令(メ)て故(キ)綿(帛)裏(ミ)之」て其(ノ)上に坐(ル)。
- 冷(エ)は又易(ヘヨ)「之」。并(セ)て豆ノ醬に「漬(シ)て酒を合(セ)て塗(レ)之」
- 又方(ニ)
- 若(シ)、腸、肛出(ツル)に隨(ヒ)て轉(廣)轉(廣)入(ル)可(カラ)不(ル)「者 生
- (シキ) 桔樓を搗(キ)て汁を取(リ)て温(メ)て猪(ノ)膏を以て中に内(レ)て手洗(ヒ)て按(
- 「抑(スル)に隨(ヒ)て自(ラ)縮(リ)入(ル)ことを得「也」 又方(ニ)石灰を熬(リ)て熱(カ
- ラ)令(メ)て布(ニ)裏(ミ)て以「以」熨(セ)之」。按(ス)に隨(ヒ)て入(ラ)令(メ)ヨ 又方
- (ニ)鐵一精を以て粉(ケヨ)「之」
- 千金方(ニ)、肛漏出(スル)を「治(スル)、壁土の散方 故(キ)
- 屋(ノ)東(ノ)壁の土一升(碎(ケ)自(芟)三挺、長(サ)一尺二寸。二味土を搗(キ)て散に「散
- 」爲(シ)て肛(ノ)頭(ノ)出(テタル)「處に粉(テ)粉(ク)自(芟)を取(リ)て炙(リ)暖(メ)て

更逆に熨【<sup>ナ</sup>熨ス】之」  
 ●又云（ク）麻履ノ底を灸（リ）て案入（ルル）方、「故ク敗レタル麻履一  
 底一枚、蟹ノ頭一枚、ニ味、蟹（ノ）頭を焼（キ）て【<sup>ナ</sup>焼（キ）ニ】蟹（ノ）頭を【<sup>ナ</sup>焼（キ）ニ】擣（キ）て【<sup>ナ</sup>散（キ）ニ】爲（シ）  
 て肛門（ノ）滯出の頭に付（ケ）て履（ノ）底を將（チ）て案（シ）入（レ）ば即（チ）出（テ）不【<sup>ナ</sup>灸】  
 「●又云（ク）脱肛年を歴（ル）トモ愈（エ）不（ル）を治（スル）方、死（ニタル）蟹（ノ）頭一枚焼（キ）  
 て烟施（サ）令（メ）て【<sup>ナ</sup>冷（キ）て肩に【<sup>ナ</sup>肩を】作（シ）て【<sup>ナ</sup>以（リ）肛ノ上に傳（ケ）て【<sup>ナ</sup>傳（ク）進（メ）  
 て手を以て按（セ）【<sup>ナ</sup>之】】（今案（スルニ）本草拾遺（ヲ）檢（シテ）云（ク）似（タル）を以て藥と爲（ス）  
 者有（リ）。蝸牛、蟹（ノ）頭、脱肛に皆焼（キ）末（キ）て傳（ケ）は【<sup>ナ</sup>之】自（ラ）縮（ル）。此（レ）  
 即（チ）類を以（テ）藥と爲（ス）【<sup>ナ</sup>也】】又云（ク）龜一尾を灸（セヨ）。立（チ）トコロニ愈（ユ）。即（チ）  
 後窮の「骨（ナリ）【<sup>ナ</sup>也】」●又云（ク）冷利を積（ミ）て脱肛（ツル）を治（スル）方 枳實一枚、「石（ノ）  
 上に摩（リ）て滑（澤）（ナラ）令（メ）て【<sup>ナ</sup>鑽（テ）把（ヲ）安（テ）蜜塗（リ）て微（シ）熾（カナラ）令（メ）て熨（セ）  
 【<sup>ナ</sup>之】。冷（エ）ハ 更（カ）易（カ）【<sup>ナ</sup>易（フ）之】】又方（ニ）鐵精【<sup>ナ</sup>鐵一精】を上に粉（テ）粉（ツ）内（ニ）入（ラ）  
 令（メ）ば、即（チ）愈（ユ）又云（ク）寒（シ）脱肛（ヲ）病（ム）方 齊（ノ）中（ヲ）灸（セヨ）。  
 年に隨（ヒ）て壯（セヨ）又云（ク）脱肛（ツル）を治（スル）方「菴石四兩 桂一尺 猬（ノ）皮一  
 枚（炙（リ）テ）黄（ナラ）令（メ）ヨ（）合（セ）擣（キ）て下（シ）篩（ヒ）て服（セヨ）。【<sup>ナ</sup>方寸（ノ）ノ）ヒ  
 日（ニ）一（タヒ）。十（タヒ）服（セハ）即（チ）縮（ル）。范汪（カ）方（ニ）脱肛（ツル）を治（スル）  
 方【<sup>ナ</sup>生（シキ）鐵三斤を水一斗を以て煮て五升を取（リ）て鐵を出（タシ）て汁を以て上（ヲ）洗（ヘ）。日（ニ）  
 三（タヒ）】●警門方（ニ）大腸ノ寒（エ）て【<sup>ナ</sup>則】、肛門洞一竅（シ）、<sup>大腸及作瘻作漏切者心小腸也又餘則穴針刺之也心小腸不</sup>出（スル）を療（スル）方

175

蟹(ノ)頭一「枚」焼(キ)て烟施(サ)令ホシヨ令(メ)之「鐵精一兩・橋(キ)筋(ヒ)て散に「散」て鳥(シ)て上に粉(ケ)て遍(カラ)令(メ)ヨ。又方(ニ)破(レタル)「麻履ノ底一枚を取(リ)て

炙(リ)て微(シ)熬(カラ)令(メ)て履(ノ)底を以て肛を按(サ)は、入(リ)て即(チ)更に出(テ)不

●穀道コクドウ 癢カユリ痛イタ(キ)を治(スル)、方第十

●病源論(ニ)云(ク)、穀道の癢(ルトイフ)は「者」「者」胃の弱ク、腸の虚(シクシ)て「則」、蟻(トイフ)の下(リ)て「穀道を侵(ス)に由(リ)」。胃の弱ク、腸の虚(シキニ)由(リ)て「則」、蟻(トイフ)の下(リ)て

穀道を侵(ス)ナリ。重(キ)者は「於」肛一門を食(ヒ)、輕(キ)者は但癢ル「也」。葛氏(カカ)

方(ニ)、下部シロの痒(リ)痛(キ)こと虫の齧(ヘル)か如(キ)を「治(スル)者。胡粉、水一銀、棗シズメノ

200

膏ツラを以て和(テ)「調(ヘ)て綿(ニ)裏(ミ)て之を導(レヨ)。又方(ニ)杏(ノ)人熬(リ)て黒

(マ)令(メ)て搗(キ)取(リ)て膏を(モ)て之を「塗(レ)」。又方(ニ)高(キ)鼻(ノ)蟻シズメ娘メ焼(キ)末(キ)て綿(ニ)裏(ミ)て孔(ノ)中に内(レヨ)。當に大(イ)に「蟬セマシ」(シ)「蟬セマシ」

て虫、出(ツ)「蜜」(シ)。又方(ニ)桃(ノ)葉一斛を搗(キ)て蒸(シ)「之」て小(サキ)口カガキノ

器ノ中に内(レ)て大(キナル)孔を上に「布(キ)て坐は虫死(ヌ)。錄驗方(ニ)、若(シ)、下(一部

ノ痒(リ)痛(クシ)て虫の齧カフか如(キ)者。「小豆一升を好(キ)苦ク酒五升をモて豆を煮て熬(ル)

と(キ)に出(タシ)て干(シ)て々(干)は「干(シ)」「干(シ)」「復、酒に内(ル)。々(酒)盡(キム)と(キ)

に「盡(キ)は」「止(メ)て「止(メ)ヨ」末(キ)て酒(モ)て「酒」に「服(セヨ)。方寸(ノ)ヒ。

日(ニ)三(タヒ)。徐伯(カ)方(ニ)、穀道「穀道」ノ忽(チ)に癢(リ)痛(ク)、「腫(レ)

日(ニ)三(タヒ)。徐伯(カ)方(ニ)、穀道「穀道」ノ忽(チ)に癢(リ)痛(ク)、「腫(レ)

205

起(キ)て生一突<sup>ツ</sup>【突キ】出(テム)と欲るを治(スル)方、槐(ノ)白皮六兩、甘草三兩、凡(ソ)

【三物、豆(ノ)汁を以て煮て故(キ)帛<sup>キ</sup>を漬<sup>キ</sup>(シ)て薄<sup>ツ</sup>【薄ク】之<sup>レ</sup>。熱(ク)は即(チ)易(ヘヨ)

●新録單「方(ニ)穀道(ノ)中に、虫有(リ)て痒<sup>カユ</sup>ルを治(スル)者、艾三分水五升を(モ)て煮て二分

玄<sup>ニ</sup>升<sup>ニ</sup>【取(リ)て「ニ(タヒ)服(セヨ)】。又方(ニ)諸<sup>本</sup>肉ヲ炙(リ)て香を令て逆<sup>レ</sup>煎<sup>セ</sup>。

【煎<sup>セ</sup>】(シ)【虫皆出(ツ)】。●棟要方(ニ)卒<sup>暴</sup>に冷(エ)て下部ノ疹<sup>一</sup>悶(スル)【疹<sup>一</sup>悶(スル)

【方。燔<sup>カク</sup>を燒(キ)て熱(カラ)令(メ)て大(キナル)醋<sup>ス</sup>を浚(シ)【之<sup>レ</sup>】て【之<sup>レ</sup>を浚(シ)】て【三

重(ノ)布ヲ「覆(ヒ)て上に坐<sup>ト</sup>ヨ。差(ユル)を取(リ)て止(メヨ)【千金方同(シ)【之<sup>レ</sup>】】進<sup>●</sup>集

驗方(ニ)虫(ノ)下<sup>レ</sup>部を食するを治(スル)方、胡粉、雄黄、分等(シ)て末(キ)て穀道ノ中に着

(ケヨ)

●穀一<sup>道</sup>ノ赤(ク)痛(キ)を治(スル)方第十一

●集驗方(ニ)穀<sup>一</sup>道<sup>ノ</sup>赤(ク)痛(キ)を治(スル)方、菘<sup>ネ</sup>糸<sup>シ</sup>(ノ)子熬(リ)て黄(ミ)黑(マ)令(メ)

て和(ツル)に、【鷄一子一黄を以て「以<sup>レ</sup>塗<sup>レ</sup>【塗<sup>ル</sup>】之<sup>レ</sup>】。日(ニ)三(タヒ)】。●又方(ニ)杏(ノ)

人を取(リ)て熬(リ)て黄(マ)令(メ)て搗(キ)て脂<sup>ニ</sup>【脂<sup>を</sup>】作(シ)て「塗<sup>レ</sup>【之<sup>レ</sup>】

●穀一<sup>道</sup>に瘡<sup>を</sup>生(ス)を治(スル)方第十二

●病源論(ニ)云(ク)穀道ハ肛一門大腸(ノ)【之<sup>レ</sup>】候ナリ。大腸虚(シク)熱(クシ)て其(ノ)氣衝(リ)

【熱(クシ)て肛一門<sup>ニ</sup>【肛門<sup>を</sup>】結(フ)。故に瘡<sup>を</sup>生(サ)令(ム)】。●葛氏(カ)方(ニ)下<sup>部</sup>に卒

に創<sup>成</sup>有(ル)を治(スル)方、蟬<sup>ス</sup>蟻<sup>ス</sup>を「搗(キ)て塗<sup>レ</sup>【之<sup>レ</sup>】。又方(ニ)豉<sup>を</sup>煮て「以<sup>レ</sup>漬<sup>セ</sup>【之<sup>レ</sup>】

●又方(ニ)豆(ノ)汁以を(モ)て『豆(ノ)汁を以て』墨を「摩(リ)て導(レヨ)」「之」●范汪(カ)方(ニ)、下(一)部に卒に創有(リ)て若(シ)轉マシヨ深ナルを治(スル)者「烏カ梅五十枚、塩五合。水七升を(モ)て三升を『三升』取(リ)て分(ケ)て三(タヒ)服(セヨ)」「又方(ニ)常シツクに舉(ノ)皮を煮て飲(メ)」「之」(已上葛氏(カ)方同(シ)「之」)

●濕シツ 26 蠶シ 左治(スル)、方第十三

●病源論(ニ)云(ク)、濕蠶(ノ)病(トイフ)は脾、胃、虛弱ナルに由(リ)て水濕スイシツの爲「水濕スイシツを爲(シ)」、乘(ラ)所て『乘(ル)所ナリ』腹(ノ)内(ノ)虫動(キ)て侵(シ)食(ヒ)て蠶シを成(ス)」「也」

●錄驗方(ニ)濕蠶(シ)『濕蠶(シ)で』下(一)部に瘡を生(ス)を治(スル)「方、胡粉、水銀、黄蘗、凡(ソ)三物治(キ)て末(キ)て粉コを等ナ分(シ)て合(セ)研スりて水「銀を散(シ)盡(シ)て」「以」創(ノ)上に傳(ケヨ) ●又方(ニ)常シツクに、猪(ノ)脰ハシラツタ腸ハシラツタ「脰腸」を炙(リ)て之を食(セヨ)。「佳(シ)」

230 「又方(ニ)溺ハナリを温(メ)て熬(カラ)令(メ)て小(キ)煑石を内(レ)て「以」洗(ヘ)」「之」 ●集驗

方に、蠶シ「虫(ヲ)治(スル)、杏人湯(ノ)方。杏(ノ)人五十枚、苦酒ス「苦酒」三升、塩一合ツ煮て五合を取(リ)て「頃(千ニ)服(セヨ)」「之」 ●令李(カ)方(ニ)、蠶シ「虫、及(ヒ)蟻アリ「虫の下部を侵ハ食するを治(スル)、枯カ樓カ「散(ノ)方 枯樓カ根四兩 亭陸タマ(ノ)子四兩、凡(ソ)二物治(合(セ)て下(一)徒ヒ「(ヒ)て「艾ヒ(ノ)汁を以て浸(シ)て綿(ニ)裹(ミ)て下(一)部ノ中ニ内(レ)て日(ニ)三(タヒ)易(ヘヨ) ●葛氏(カ)方(ニ)、穀道ノ「蠶シ創ノ赤(ク)痛(ク)、又痒(ル)を治(スル)方。杏(ノ)人熬(リ)て黑(マ)令(メ)て搗(キ)て綿を以て裹(ミ)て導(レヨ)」「之」」「又方(ニ)槐

235

(ノ)皮、桃(ノ)皮、練ノ子、合(セ)末(キ)て猪(ノ)膏に和(テ)て導(レヨ)。  
 ●又方(三) 芫<sup>ネンシヤ</sup>糸(ノ)「子熬(リ)て黄(ミ)黒(マ)令(メ)て鷄子黄に和(テ)て塗(リ)導(レヨ)之」  
 方(ニ)棗(ノ)膏を以て「水銀に和(テ)て相(ヒ)得令(メ)て長(サ)三尺ナル綿に裹(ミ)て宿(ル)」と(キ)に下部に導(レヨ)「之」  
 ●又方(三) 胡粉、雄黄、分等(シ)て末(キ)て下部(ノ)内に導(レヨ)。  
 ●范汪(カ)方(ニ)、穀道(ノ)「蠶瘡ノ」<sup>\*</sup>「赤(ク)痛(ク)、又痒(ル)を治(スル)方。組<sup>ク</sup>(ノ)腸を搗<sup>ツ</sup>いて綿に塗<sup>ヌ</sup>て指の如(ク)シ」以之を導(レヨ)。虫出(ツ)

●疳濕を治(スル)、方第十四

●病源論(ニ)云(ク)、人甘味を嗜(ミ)て多(ク)すること有(ル)ときは、「而」腸胃の間を動(シ)て諸(ノ)虫「侵(サ)令(ムル)ことを致(シ)、府藏を食(フ)。此(レ)、猶是ノ蠶(ナリ)也」。但虫甘に因(リ)而動(ク)。故に名(ツケ)「之」て「甘と爲(ス)也」。其(ノ)初(メノ)患(フル)「之」状、手足焼(クルカ)コトクに疼(キ)て腰<sup>脊</sup>力無(ク)、<sup>力</sup>力無(シ)。夜卧(シ)て煩(シ)、<sup>昏</sup>昏(シ)と(シ)て喜(ミテ)忘<sup>モラフ</sup>シ、<sup>痛忍不欲言</sup>嘔<sup>ム</sup>と(シ)て眼<sup>涙</sup>、夜夢顛倒(シ)、飲食味無(ク)して「而」顔「色を失<sup>ヒ</sup>、<sup>失</sup>失(フ)睡を喜<sup>ム</sup>て起(クル)ときは「則」頭眩(キ)、體重(ク)、<sup>腫</sup>腫<sup>酸</sup>、<sup>酸</sup>疼(ク)。<sup>酸</sup>酸<sup>疼</sup>疼(シ)」。其<sup>レ</sup>上(リ)て五藏を食(フトキハ)、「則」、「心(ノ)内、懊(惱)す。出(テ)て咽(喉)、及(ヒ)齒斷<sup>ル</sup>。齒斷(ニシ)て」下(リ)て腸(膈)を食(フ)ときは、瘡爛を生(シ)て開(ク)。胃(ノ)等「氣虛(シ)ク」逆(ヘ)は「則」變(シ)て嘔<sup>噦</sup>噦(ス)。<sup>嘔</sup>嘔<sup>噦</sup>噦(ス)。急(ナル)者は數日アて便(チ)死(ヌ)。

250

亦、緩（キ）者は止（ム）こと有（リ）【緩有（ラ）は「者」止（ム）】。沉「マ、嘿々」と（シ）て支節<sup>ヒツ</sup>疼<sup>ヒツ</sup>キ重（ク）、【重シ】。食、飲減少（シ）て面の顔色无（シ）。 ●又云（ク）五「甘、一は是（レ）、白甘、

人（ヲ）令て皮、膚、枯、燥<sup>カ</sup>キ面の顔色を失（ハ）【令<sup>命</sup>（ム）】。ニは是（レ）、赤甘、内（リ）て「五藏を食

（フ）ときは、人を令て頭髮<sup>イ</sup>、頭髮<sup>イ</sup>を、焦<sup>カ</sup>レ枯（レ）【令<sup>命</sup>（ム）】。三は是（レ）、燒<sup>知</sup>、甘、人（ノ）脊<sup>脊</sup>ノ背<sup>背</sup>、

脊<sup>脊</sup>ノ背<sup>背</sup>を食（ヒ）て「五藏に遊<sup>遊</sup>、解行（スル）ときは、體重ク浮腫アリ<sup>\*</sup>、浮腫ス。四（ハ）是（レ）甘

鹽。人を令て下部、疼<sup>疼</sup>、癢（リ）、腰脊、變<sup>變</sup>「急（ナラ）【令<sup>命</sup>（ム）】。五（ハ）是（レ）黒甘、人（ノ）五藏

を食（フ）ときは、多（ク）黒（キ）血を下す。數日（アリ）て即（チ）死（ヌ） ●又云（ク）面「青

（ク）、頰赤（ク）、眼に精、光无（クシ）て【无（ク）】、唇口焦（レ）燥キ、腹脹（レ）て塊（ノ）コトキ

ナル有（リ）て日々に度（セ）損（ハ）は【者】是（レ）、甘の人（ノ）五藏を食（フ）ナリ。死に至（ル）

マテ、覺（エ）不 ●又云（ク）五甘、緩（ク）は【者】則<sup>則</sup>、變（シ）て五蒸と「成（ル） ●千金方（三

云（ク）論（ニ）曰（ク）凡（ソ）疝<sup>疝</sup>、濕ノ「之」病を爲（ス）ことは、皆暑月に多く、肥<sup>肥</sup>濃油膩（ヲ）

「食して食シ、冷を取（リ）て睡<sup>睡</sup>、眠するに由（リ）て得（ル）所ナリ「之」。礼（ニ）曰（ク）、君子ハ

盛暑（ノ）「之」月、「滋<sup>滋</sup>キ味を薄シ、薄<sup>薄</sup>ス」肥<sup>肥</sup>濃、煮<sup>煮</sup>、麩<sup>麩</sup>を食（スル）こと无（カレ）。【无（ク）】此

（レ）人に利（アラ）不（ル）人<sup>人</sup>利（セ）不（ル）所<sup>所</sup>以（ナリ）也<sup>也</sup>。養<sup>養</sup>、生ノ者、宜（シク）深<sup>深</sup>ク

戒ム【宜<sup>宜</sup>（シ）】「之」 ●又云（ク）疝<sup>疝</sup>、濕アテ下の黒（ミ）、醫の治（スル）こと能（ハ）不（シ）て

死（ナム）と垂<sup>垂</sup>るを治（スル）方。麝香三分、丁<sup>丁</sup>子香三分、甘草三分、犀角三分、四味並<sup>細</sup>カニ末（キ）

【之】て合（セ）和（シ）て「別に、塩三合、椒<sup>椒</sup>三合、豉<sup>豉</sup>二合を以て、【以】塩三合、椒<sup>椒</sup>三合、豉<sup>豉</sup>二合を、

260

255

水二升を以て煮て一升を取（リ）て滓を去（ケ）て「末（キタル）散を内（レ）て和（セ）て分（ケ）て二服に作（シ）、作（セ）」大（キナル）孔に灌（ケ）且に一（タヒ）灌（ケ）酉（ノ）時に一（タヒ）灌（ケ）  
●又「云（ク）生（シキ）冷（エタル）酢（キ）滑（カナルモノ）を忌（メ）但、是に、油、

膩（ヤカナルモノ）、醬、乳、酪、廿日之を慎（メ）大々（イニ）佳（シ）  
●又云（ク）凡（ソ）疔には一切皆忌（メ）唯シ、白飯、唯白（忌）飯、塩、豉、茵蔯、苦苳、燕、禁する限に在（ラ）

不 ●鉄驗方（ニ）甘濕を治（スル）方。「治（スル）方」青 相二兩、苦參二兩、雄黄二兩、

石留黄、石留黄 二兩、狼牙三兩、燕夷二兩、雷丸二兩、梨蘆一兩、凡（ソ）八物、橋、篩（ヒ）て、

鳩（キ）で篩（ヒ）て取（リ）て杏（ノ）人の大（キサ）如（シ）て大（キサ）の如（クシ）て下部

部の中に内（イ）レ「也」●醫門方（ニ）、疔蠶を療（スル）、所（在）を問（フ）こと無（キ）、方 死（ニタル）

蝦蟇を取（リ）て焼（キ）て「灰に作（シ）て好（キ）醋を以て和（テ）て瘡（ノ）上に塗（レ）即（チ）愈

（ユ） ●救急單驗方（ニ）、急（一）蛇を療（スル）方。無（一）食（一）子末（キ）て腹（ノ）内患（フ）者には下

部に「下部」吹（ケ）立（チ）コロニ 驗（アリ） ●又方（ニ）白（キ）馬（ノ）尿一升を灌（ケ）。

虫惣て出（ツ）驗（アリ） ●又方（ニ）文蛤を焼（キ）タル灰に取（リ）て臈「月（ノ）猪（ノ）

脂に和（テ）て塗（レ） 又方（ニ）練（リタル）熨（石）、桂（心）、徐（長）卿、徐（一）長（一）卿、各、等（一）分

（シ）て末（キ）て塗（レ）「驗（アリ）」

●病源論（ニ）云（ク）、諸（ノ）痔と（イフ）は「者」謂（ユル）牡（一）痔牝（一）痔脉（一）痔腸（一）痔血（一）痔（ナリ）

280

「也」。疔瘡(ハ)肛(ノ)邊に、穴を生(シ)て鼠の乳如(シ)て「如」。時々、膿(ハ)血を出(タス)。  
 疔瘡ハ肛ノ邊腫(レ)て創(ハ)創(ハ)を「生(シ)て」而血出(ツ)。脉瘡は肛(ノ)邊に、創を生(シ)て癢(リ)  
 痛シ。腸(ハ)瘡は肛(ノ)邊、腫(ハ)腫(ハ)酒「核(ハ)核(ハ)ムテ痛(シ)」。寒に發(リ)て「發(リ)て」寒に(シ)て「熱(キ)  
 血出(ツ)。血瘡は便に因(リ)而清(ハ)血隨(ヒ)て出(ツ)。又酒「瘡有(リ)」。有(リ)」。又氣瘡は大便秘  
 難(ニ)に(シ)而血出(テ)、肛、亦、外に「出(ツ)。良久(シクシ)て入(リ)」。肯(カ)不(シ)諸(ノ)瘡は皆、傷(ハ)  
 風(シ)、房(ハ)室(シ)、慎(マ)不(シ)、醉(ヒ)飽(キ)て陰(ハ)陽(ハ)を「合(セ)て」勞を致(シ)て血氣を擾(ハ)  
 由(リ)而「血氣を擾(シ)テ」而「經(ハ)脉流(ハ)溢(シ)て」腸(ノ)間に滲(ハ)漏(シ)て「衝(リ)下(リ)」。下部に  
 發(ル)。瘡久(シク)、差(エ)不(シ)、變(シ)て癩(ハ)爲(ル)也」。●養生方(ニ)云(ク)、大「便を忍  
 (ヒ)て出(タサ)不(シ)、不(シ)久(シクシ)て氣瘡を作(ス)。●龍門方(ニ)云(ク)、(一)三  
 日(ク)、腫(レ)て息肉を生(ス)」。生(シ)て「狀、棗の「核(ハ)核(ハ)ノ如(クシ)て」如(シ)」。孔に、膿(ハ)  
 血有(ル)を、名(ツケ)て雄(ハ)瘡(ト)曰(フ)。二(ニ)曰(ク)、孔ノ傍に、創有(リ)て内引(キ)、  
 孔痛(クシ)て膿(ハ)血を「出(タシ)て」虫の行(ク)か如(キ)を、「如(シ)」。名(ツケ)て雌瘡と曰  
 (フ)。三(ニ)曰(ク)孔に膿(ハ)アテ虫ノ行(ク)か如(キ)を、名(ツケ)て脉(ハ)瘡(ト)曰(フ)。四  
 (ニ)曰(ク)大行(シ)て肛(ハ)出(ツ)ルコト數(ハ)寸ナルを、名(ツケ)て腸瘡と曰(フ)。五(ニ)曰(ク)大  
 行の後血(アリ)て人を令(テ)色(ハ)少(カ)カラ「令(メ)懈(ハ)墮(シ)て」食を欲(セ)不(ル)ヲ、名(ツケ)  
 て氣瘡と曰(フ)。皆、猪肉を食(シ)、酒を欲(シ)、寒を「傷(ヒ)て」傷(ハ)寒(シ)、水(ハ)飲(ム)  
 コト過(ハ)多(ナリ)て得(ル)所(ナリ)也」。●瘡病(ノ)禁忌 ●千金「方(ニ)云(ク)、寒食、猪

285

290



310

分 黄芩ヒキ二分「桂心一分 七物ナシ末キ」て「ナシ末キ」て「下ナシ筋ヒ」て酒を以て服セヨ。方寸ノ。日ニ。三タヒ。血止マは「ナシ有リ」。又云ク。穀道ノ癢リ。痛キ。痔ノ瘡ヲ治スル。槐一皮一膏一。方。槐一皮一五兩。練子五十枚。桃ノ八十枚。甘草二兩。蜜ニ兩。小豆ニ合。白芷二兩。七物吹一咀シて猪ノ膏二升ヲ以て煎シて「白芷ヲ令テ黄マ」令テ「ナシ」メて藥成ル。ヒキに津ヲ絞去ケて傳ケヨ之。日ニ。再ヒ。三タヒ。良シ。《今案ハスルニ。様要方ニ云ク。痔ヲ療スルニ。火ノ如ク。刀ヲ燒キて割レ。行坐恐。可カラ。不ハ。床下。リテ藥ヲ着ケて床上。ラハ即チ痛キこと完シ。神タ効アリ。●千金方ニ云ク。五痔ニ。氣一痔有。温寒濕勞ニ即チ發ル。蛇ノ脫主。ス之。牡痔ハ穴ヲ生ス。鼠ノ乳ノ如クシテ在乳孔ノ中ニ在リて頗タ。外ニ見ユ。於テ更衣に妨ク。鬘ノ甲主。牝痔ハ孔ノ中ニ從起キテ外腫レて五六日ニ自ラ潰エて膿一血ヲ出タス。蝟ノ皮主。腸一痔ハ更衣に。挺ケ出テて久シク。乃チ縮ル。牡猪ノ左足ノ懸蹄。甲主。脉一痔ハ更衣に。清血出ツ。蜂ノ房一蜂一房一主ス之之。藥皆下シ。筋ヒて分等シて其ノ病ニ隨ヒて其ノ主スル藥ヲ倍キて三分ニ爲シて且ニ井花水ヲ以て服セヨ。半方一寸ノヒ。病甚シクは「者一且暮ニ服セヨ之」。亦。四五服ニ至ル。可シ。又云ク。痔一下一部ヨリ。濃一血ヲ出タシテ虫有。リテ旁ニ孔一一一を生ス。を治スル。方。槐ノ。白皮一擔一。小刀一て釜ノ中ニ「内レ」て煮テ味極メテ出タサ令メテ令ム。木ノ。釜ノ中ニ置キ

315

320

て寒温を適（へ）て其（ノ）中に坐て大便セムト欲<sup>キ</sup>。狀<sup>ハ</sup>ハ<sup>ハ</sup>狀（クシ）て虫悉（ク）出（ツ）。冷（エ）は又易（へヨ）之<sup>レ</sup>。又云（ク）五痔（ノ）方、熊ノ「膽を塗（レ）」。塗（リ）て差（ユル）を取（リ）て乃（チ）止（メヨ）。神（タ）良（シ）。一切の方、皆、此（ノ）方に及（ハ）不<sup>レ</sup>。又方（ニ）桃ノ「根を煮て洗フ之」。僧深方（ニ）、痔を治（スル）、神方<sup>ニ</sup>。槐ノ耳<sup>ヲ</sup>を散に「散」爲（シ）て服（セヨ）。方寸（ノ）匕。亦、穀道（ノ）中に粉<sup>ヲ</sup>「粉ク」。甚（タ）良（シ）。録驗方（ニ）、痔を治（スル）方白、蜜塗（レ）之。孔有（ラ）は、以て孔（ノ）中に内<sup>レ</sup>「内ル」。張一温<sup>ク</sup>。表上（リ）、蜀<sup>ヲ</sup>に使トシて得（ル）所（ナリ）也。又方（ニ）槐（ノ）根を「煮て洗（ヘ）之」。香婆（カ）方（ニ）、人ノ下脚<sup>ヲ</sup>「下部」下<sup>ニ</sup>部に「熱一風虚一結（シ）て痔を成（シ）て久（シク）、差（エ）不（シ）て人を令て血下（サ）令<sup>ニ</sup>」て面<sup>ニ</sup>黄<sup>キ</sup>シ瘦<sup>レ</sup>せて力無（キ）を治（スル）。方白（キ）錫糖<sup>ヲ</sup>「錫一糖」。但少々「空腹に食（セヨ）。食（セ）は」差（エ）は乃（チ）止（メヨ）。若（シ）、是（レ）、秋月（ナラ）は彌宜（シ）。●集驗方（ニ）、痔を治（スル）方。生（シキ）槐の皮十兩。上（ノ）皮を削<sup>リ</sup>去（ケ）て一物煎（カニ）搗（キ）て丸（カシ）て彈丸の如（クシ）て綿に裹（ミ）之。て穀道の中に「内ル」。●様要方（ニ）方<sup>ニ</sup>痔を療（スル）、神方。鱧魚<sup>ノ</sup>三頭、腹を破（リ）て腸を「取（リ）て炙（リ）て少（シ）許、少（シ）許を（モ）て」炙<sup>ク</sup>香（シカラ）令（メ）て綿<sup>ヲ</sup>「綿一絮」を以て裹（ミ）之。て穀道（ノ）中に内（レヨ）。「一飯ノ項」一飯ノ項に虫當（ニ）出（テ）て魚ノ腸を食<sup>フ</sup>「當」更<sup>ニ</sup>易（ヘ）て新（シキ）香を着（レヨ）。三枚を盡（シ）て「盡セハ」即（チ）「差（エ）」。●葛氏（カ）方（ニ）、腸痔を患（ヘ）て大便毎、恒に血を去（ルヲ）治（スル）方。常（ニ）蒲一黄を服（セヨ）。方寸（ノ）匕。日（ニ）三（タヒ）。



有(リ)。「』一時出(ツ)。楚一「痛瀉(痛) (シ)て「楚一痛(ス)。瀉(シ)て」後に遂に、胡一瓜ノ所往(ヲ)失(ヒ)て驟一馬に登(リ)而馳(ス)。

●九虫を治(スル)、方第十六

●病源論(二)云(ク)、九虫(トイフ)は「蒼」一は伏虫と曰(フ)。長(サ)四分。ニ(ハ)蛔一虫と曰(フ)長(サ)一「尺。三(ハ)白虫と曰(フ)長(サ)一寸。四(ハ)肉虫(ト)曰(フ)狀、爛レタル李の如(シ)。五(ハ)肺痿虫と曰(フ)狀、「蚕の如(シ)。六(ハ)胃(虫)と曰(フ)狀、蝦(蟻)一蟻(蟻)の如(シ)。七(ハ)弱一虫と曰(フ)狀、瓜ノ瓣(サネ)の如(シ)。八(ハ)赤虫と曰(フ)狀、生(シキ)肉の如(シ)。九(ハ)蟻虫と曰(フ)至(リ)て細微(ニシ)て形、菜ノ虫の如(シ)。此(ノ)諸(ノ)虫、

「腸胃(ノ)之」間に依(リ)て「依(ル)」。若(シ)、府藏(ノ)氣實(ル)ときは「則」、害を爲(サ)不。若

(シ)、虚(シキ)ときは「虚(シク)は「則」、能(ク)「侵シ食ム。其(ノ)虫(ノ)之」動(ク)に隨(ヒ)而變(シ)て諸(ノ)病を成(ス)」。●承租方(三)云(ク)、九虫丸「九虫丸」百「虫を治(スル)方  
牙子、貫衆、蜀法漆、蜀漆、蕪夷、雷一丸、橘(ノ)皮、凡(ソ)六物、分等(シ)て搗(キ)篩(ヒ)て蜜丸(シ)て大豆の如(ク)シ」て漿(モ)て服(セヨ)。廿丸。【廿丸】日(ニ)ニ(タヒ)。「虫を下(サ)令(ム)」。●又云(ク)九虫散「藿蘆、藿蘆、二兩(炙(レ)シ)貫衆一兩「千漆二兩(炙(レ)シ)狼

牙一兩 凡(ソ)四物下(シ)篩(ヒ)て羊(ノ)矢(灸(レ)シ)汁を以て一合を「服(セヨ)」。服(スル)シ」と

日(ニ)三ヒ

●三虫を治(スル)方第十七

365 ●病源論(ニ)云(ク)、三虫(トイフ)は「者」長虫、赤虫、燒虫(ナリ)「也」。猶九虫「虫(ノ)之」數(ナ

リ)「也」。長虫は蛔虫(ナリ)「也」。長(サ)一尺。動(カ)は「則」吐(キ)て清一水を出(タス)。清一

水を吐(ク)出(テ)心「痛(クシ)て實(ク)ときは「之」則「死(ヌ)」。赤虫は狀、生(シキ)肉

の如(シ)動(カ)は「則」腸鳴(ル)燒虫は「至(リ)て細一微(ナリ)」。形、菜(ノ)虫の如(シ)「也」。

胴腸ハラダマ、胸徒音反、腸(ノ)間に居て多(ク)は「則」痔を爲(ス)。「劇(シク)は「則」癩六類、癩六類を爲(ス)。

人に因(リ)て瘡處、瘡處(アリ)て「以」諸(ノ)癰於音反、疽七余反、癰音漏、瘰古各反、癧六介、斷虫ハツク、斷虫ハツクを生(ス)。

爲(サ)不ヒイフ所無(シ) ●様要方(ニ)三虫を治(スル)方「茱萸ノ東行の根ノ大(キナル)者長

(サ)一尺を取(リ)て「大(キナル)者」取(ル)長(サ)一尺「麻(ノ)子八升を鳩(キ)之」て

細(カク)「茱萸を削(リ)て八升(ノ)酒を以て合ナ漬(シ)て一宿(シ)て布(モ)て滓を絞シ去(ケ)

て宿(ル)と(キ)に食(スル)こと勿(クシ)て「勿(レ)」。且に「起(キ)て盡(ク)之を飲(マ)

は「之を飲(ミ)盡(サ)は」便(チ)虫を下(ス)。ミ虫、或は完ヌクク(シ)て出(ツ)。或(ハ)以て半

(ハ)爛(レ)、或(ハ)黄(ナル)汁ナアルは「者」是(レ)虫ノ爛爛レタルナリ「也」。藥を作(ス)、時道

フコト莫(レ)「之」。虫下(ラ)不ト ●葛氏(カ)方(ニ)三虫を治(スル)方。桃(ノ)葉を搗(キ)

て汁を絞(リ)取(リ)て一升を飲(メ)

●寸白を治(スル)方第十八

●病源論(ニ)云(ク)、寸ナ白(トイフ)は「者」九虫の内(ノ)「之」一虫是(レ)ナリ「也」。長(サ)一寸

(ニシ)而「色白(クシ)て「色白(ク)」。形小(サク)扁(シ)。府藏の虚弱に因(リ)而能(ク)發

動す。或（ハ）云（ク）、「白一酒を飲（ミ）て桑（ノ）樹（ノ）枝を以て牛（ノ）肉を貫（キ）て炙（リ）て食シ、并（セ）て生（シキ）乗（成）ス所（ナリ）」。又「云（ク）生（シキ）魚（ヲ）食（シ）て後即（チ）、乳一酪を飲（マ）ハ、亦、生（サ）令（ム）之」。又云（ク）此（ノ）虫長「長（サ）一尺

ニナレハ「則」人を令て死（ナ）令「令」之（ム）之。葛氏（カ）方（ニ）、寸白を治（スル）方 多（ク）「種ノ子を食（スル）、亦佳（シ）」。又方（ニ）猪（ノ）血を煮て宿（ル）と（キ）に食（セ）不（シ）て明

旦に、飽クマテ之を食（セヨ）。又云（ク）濃（ク）猪「猪」檀一柳を煮て三升を飲（メ）。虫「則」、

出（テ）盡（ク）。又云（ク）虻虫（ヲ）治（スル）方、龍膽（ノ）根を用（ト）て多一少、意に任（セ）

て濃（カラ）令（メ）て滓を去（ケ）て宿（ル）と（キ）に「宿（リ）て」食（セ）不（シ）て清朝に一

二升（ヲ）服（セヨ）。二（タヒニ）過（キ）不（レ）。又方（ニ）生（シキ）艾を搗（キ）て汁を絞（リ）

取（リ）て即斗宿（ル）と（キ）に食（セ）不（シ）て朝に「一升を飲（メ）。常に虻を下（ス）。集驗

方（ニ）、寸白を治（スル）方。茱萸（ノ）根を取（リ）て土を洗「去（ケ）て切（リ）て一升。漬（シ）

て一宿（シ）て平一旦に分（ケ）て再一服（セヨ）。樹は北ノ陰の地ノ「根を取（レ）。又方（ニ）桑（ノ）

根（ノ）白皮切（レル）三升水七升を以て煮て二升を取（リ）て宿（ル）と（キ）に「宿（リ）て」食

（スルコト）無（クシ）て一（タ）ヒに頓一服（セヨ）之。香菱（カ）方（ニ）云（ク）、狼一牙丸寸

白を治（スル）方。「狼牙四分 蕪夷四分 白欬四分 右脊四分 干漆四分 右五味搗一篩（ヒ）て搗

（キ）て篩（ヒ）て完（キ）豆の如（クシ）て十丸（ヲ）服（セヨ）。醫門「方（ニ）、寸白を療（スル）方 橘（ノ）皮 狼牙 雷丸 分一等（シ）て末（キ）て湯を以て「服（ス）可（シ）。方寸（ノ）

375

ヒ。『ヒト』日(ニ)一(タヒ)。虫當に盡(ク)出(ツ)「當」(シ)。  
 ● 錄驗方(ニ)、寸白を治(スル)方 大(キナル)檳榔「廿枚(碎(ケ))」葱白「葱白」切(レル)一升、或一合、凡(ソ)三物水五升を以て煮て二升半を「取(リ)て頓(チ)服(セヨ)」。即(チ)下(ス) 今案(スルニ)酢に雄黄を研(リ)て之を付(ケヨ) 又方(ニ)「酢に檳榔(ノ)子を研(リ)て付(ケヨ)」之 又方(ニ)胡桃(ノ)子を研(リ)て之を付(ケ)、并(セ)て食(セヨ)「之」 又方(ニ)芥(ノ)子上(ノ)如(クセヨ)

● 蛔虫を治(スル)方第十九

400

● 病源論(ニ)曰(ク)、蛔虫(トイフ)は「者」是(レ)、九虫(ノ)「之」内の一虫(ナリ)「也」。長(サ)一尺、亦、「長(サ)五六寸有(リ)」。或は府藏の虚弱(ナル)に因(リ)而動(ク)。或(ハ)甘を食するに因(リ)て化(シ)而動(ク)。「其(ノ)發動(スル)ときは「發動(セ)は「則」腹痛(シ)」。發(リ)「發(リ)て」腫、聚(セ)作(シ)て上(リ)下(リ)に行(キ)來(リ)て痛(キ)こと休(リ)止有(リ)」。亦心を攻(セ)めて痛(シ)。口喜(ミ)て吐(ク)キ涎(レ)、及(ヒ)、清(ク)水を吐(ク)。腸心を貫(ク)、者(ハ)「則」「死(ス)」。新録方(ニ)、蛔心痛(クシ)て發(ル)ト(キ)に「發(リ)て」水を吐(ク)を治(スル)方 練(ノ)樹(ノ)東「南の下(ノ)根」露(ハナラ)不(ル)、者を取(リ)て切(リ)て一升。水二升を以て煮て一升を「一升」取(リ)て滓を去(ケ)て七合(ヲ)服(セヨ)。十里久(シク)ア(リ)て更に、餘(レル)者(ヲ)温(メ)て服(セヨ)「之」。當(ニ)蛔三百枚を利(シ)て差(ユ)「當」(シ)。其(ノ)練は着(ツ)ケル者(ヲ)「取(レ)」。雌練と名(ツク)。毒微(カナリ)。「雌」(ト)名(ツク)。「練は毒微(カナシ)て」子无(ク)は、雄練と名(ツク)。毒烈(シ)。「子无(ク)は雄」名(ツク)。「練(ハ)毒烈(シク)て」

405

或(ハ)人を殺(スニ)至(ル)、[者]。諸(ノ)虫(ノ)病八月ノ上旬療(セム)と欲(ヨ)〔之〕。中旬已後は虫、[虫]。[藥を下(ス)トモ中(ラ)不(之)]。●廣洛方(ニ)云(ク)、蛔虫、寸白を治(スル)方 酸(ス)キ石「糶(ノ)根を取(リ)て切(レル)ニ升。土七寸を入(レ)て東引サセル者 檳榔十枚、(碎

(キ)切(レ)」。[水七升をモ(テ)煮て二升六合を取(リ)て滓を絞(去)ケ)て少(末(キタル)を着(レ)て煮て稀(カユ)「糶(ノ)稀(カユ)糶(ノ)稀(カユ)」に作(シ)て平晨に空腹に頓(ク)食(セヨ)〔之〕。少間(オク)て虫死(ニ)て快利(セ)は差(ユ)」。●錄驗方(ニ)、蛔を治(スル)薑(一)苳湯(一)薑苳湯(ノ)方 薑苳(ノ)根二斤 洗(ヒ)て細(カク)切(リ)て「水七升を以て煮て三升を得て食(タ)先(タ)食(ヨ)リ先(ニ)盡(ク)飲(メ)〔之〕」。人弱老(ナラ)は分(ケ)てニ(タ)服(セヨ)〔之〕。[一宿に蛔悉(ク)爛(レ)下(ル)。人強(ク)は「者」盡(ク)に服(セヨ)〔之〕]

●<sup>知消反</sup> 蛔虫を治(スル)、方第廿

●病源論(ニ)云(ク)、蛔虫(トイフ)は「者」[者]猶是(レ)、九虫(ノ)内の一虫(ナリ)〔也〕。形甚(タ)小(サクシ)て今(ノ)「之」<sup>百物類</sup> 蛔虫(ノ)状(ノ)如(シ)」。府藏虚(弱)ナル(ニ)因(リ)て「而」發(動)する(ト)を致(ス)。[致(ス)に]甚(シキ)者は「則」、「能(ク)、痔、瘻、疥、癩、癬、癰、疔」諸(ノ)瘡を成(ス)。此是(レ)人體虚(シク)は極(メ)て「重(シ)者」。故に蛔虫動作(スル)に因(リ)て「因(リ)て」<sup>イ</sup>「因(リ)て」動作(シ)て「爲(サ)不(ヒ)イフ(コト)無(シ)〔之〕」。●様要方(ニ)云(ク)、長虫、赤虫、蛔虫 寸白を「療(スル)方 薑苳(一)苳(一)苳(一)根を以て水七升を以て「煮て二升を、二升」取(リ)て分(ケ)てニ(タ)服(セヨ)」。《今案(スルニ)新錄方(ニ)薑苳(ノ)根二斤

【・范汪（カ）方（ニ）蟻虫を治（スル）方 練（アキ）實苦酒（ミ）苦（ク）酒（ス）（ノ）中に淳（シ）て綿を以て「裹（ミ）  
 「之」て穀（ノ）道（ノ）中に塞（サセ）ク」。ニ寸を入（ラ）令（メ）て日に易（ヘヨ）  
 ・録驗方（ニ）蟻（ミ）虫  
 の穀道（ノ）中に在（リ）て痒（リ）、或（ハ）痛（キ）を治（スル）方 附子（ツ） 干薑（カ） 薑（カ） 蜀椒（シ） 椒（カ）各  
 一兩（リ）搗（キ）篩（ヒ）て綿に裹（ミ）て穀（ノ）道（ノ）中に内（レヨ）。再（ヒ）罨（クル）に過（キ）不（シ）  
 て良（シ） 【・新録方（ニ）蟻（ミ）虫を病（ミ）て或（ハ）心を攻（メ）て痛（キ）こと列（ス）か如（ク）  
 シ）て口に清（ス）汁を吐（ク）を治（スル）方。生（シキ）艾を「搗（キ）て汁（ヲ）絞（リ）取（リ）て宿（ル）  
 と（キ）に「宿（リ）て」食（スル）こと勿（クシ）て「勿（レ）」。清朝に、一升を飲（メ）。【・飲（ミ）  
 當に虻を下（ス）【當（ト）シ）  
 ・又方（ニ）練（ノ）木（ノ）根を取（リ）て判（キ）【之】て水を以て煮  
 て濃（キ）赤（ク）黑（キ）色（ナラ）令（メ）て汁を以て米に「合（セ）て煮（カ）強（カ）麩（カ）に作（シ）て宿  
 （ル）と（キ）に「宿（リ）て」食（スル）こと勿（クシ）て清（ス）朝に食（セヨ）【之】。稍（ク）に、一ヒ  
 從（ヒ）始（メ）と爲（シ）て「小（シ）息（イ）フて復（ス）一ヒを食（ス）半升（ノ）糜（カ）を食（シ）て便（チ）虻（ミ）下  
 （ス）。秘方（ナリ）「又方（ニ）蕙（イ）一莖（イ）根（イ）二斤 細（カク）判（リ）て水（イ）七升（イ）を（モ）て煮（イ）て三升（イ）を  
 取（リ）て分（ケ）て再（ヒ）服（セヨ）。亦、【以（カ）糜（カ）に作（ス）可（シ）

注

- 1、左傍後筆訓「シリノヒスヘ」。
- 2、左傍緑筆「女方反」。
- 3、後筆返点「レ」と仮名「ニ」。
- 4、右傍訓「コフ」の下に後筆「シ」。
- 5、「似」の下に「似<sub>ニ</sub>」とあり。
- 6、書陵部本には「暖<sub>ヌク</sub>メテ」とあり。
- 7、頭注「蝕」敗瘡也「麩如蟲」食草「木之葉」あり。
- 8、左傍緑筆擦消「荻オキ」。
- 9、「射」に頭注「射者麝欵」あり。
- 10、「搗節」の右傍に後筆訓「ツイ・フルイ」あり。
- 11、五十九行末への転倒符あり。
- 12、後筆返点「レ」と仮名「ト・ヲ」。
- 13、後筆返点「レ」と仮名「ニ」。
- 14、後筆返点「一」と仮名「ヲ」。
- 15、後筆返点「ニ・レ」。
- 16、後筆仮名「メ」。
- 17、一字欠落か。仁和寺藏医心方巻第七にも該当字なし。
- 18、左傍緑筆擦消「雙」。
- 19、百二十六行頭への転倒符あり。
- 20、朱書にて「等」を訂す。
- 21、書陵部本には「カハル／＼」とあり。
- 22、書陵部本には「廣(サ)を」とあり。
- 23、書陵部本には「衣帯を」とあり。
- 24、頭注「玉篇曰」瑞「徒計徒」結「切」隠蔽兒」あり。後筆

医心方巻第七(釈文)注

か。

- 25、朱書にて「裏」を訂す。
- 26、左傍緑筆擦消「女方反」。
- 27、「合」一字欠落か。仁和寺藏医心方巻第七には「塩一合・合・煮」とあり。
- 28、二百三十七行への転倒符あり。
- 29、本文「戒」に「戒欵」とあり。
- 30、後筆仮名「牡」に「ホ」、「牝」に「ヒシ」。書陵部本には「牝一痔」、「腸痔」とあり。
- 31、書陵部本には「牝(送)痔ハ」とあり。
- 32、頭注「更衣」如廁云々、ユク」。
- 33、書陵部本には「云」とあり。
- 34、頭注「野鶉」痔病名云々」。